

授業の具体的展開例

- T：ではこれから、朗読の練習を始めます。
練習の前に、昨日の学習で整理したノートを見直して、特に工夫したい部分や読み方について、確かめておきましょう。本番の発表と同じように大きな声を出してかまいませんので、のびのびと声を出して練習しましょう。時間は5分間です。では、各自で始めてください。
- C：（各自で練習）
- T：はい、そこまでです。ではとなりどうして聞き合いをして、お互いに意見を交流します。読み手の人は、自分が表現しなかったことや工夫したことを話してから朗読しましょう。
- C：（朗読→意見交流）
- T：どんな意見が出たか、発表してください。
C：大きな声で読んでいたので、かまきりの元気さはよく伝わりましたが、ずっと同じ速さだったので、早くしたり間を取ったりしてはどうかとアドバイスしました。
C：「うちゅう・いるか」の1行目と2行目はよく似た言葉を使って同じ長さにしてあるので、同じ調子で読んだのですが、リズムがあっっておもしろいという意見をもらえました。
C：おれはかまきりの「おう」のところをどのように読むとよいか分からなかったのですが、二人でいろいろな読み方を試してみました。

「活用」の力を育てる評価の工夫

〈「ペア学習」の場面での評価〉

生徒が個別に活動している場面では、教師はできる限り生徒の観察に努めたい。その際、評価の視点を明確にし、焦点化を図っておくことが大切である。

本時では、表現意図を聞き手に話しているか、また、聞き手が具体的な言葉で評価を伝えているかを観点にして、生徒の様子を観察する。

観察の際、学級内の多くのペアに目を向けるためには、教師は教室全体を見渡せる位置に立ち、事前に用意した座席表などに、記号を使うなどして簡潔に記入していく。ここでは、細かな点を把握することではなく、学級の全体状況を把握することを目的として評価活動を行う。そのことにより、必要な指導を考えたり、練習の時間を調整したり、支援が必要なペアに目をつけたりすることができる。

〈ビデオ機器の活用〉

朗読を評価するときは、音声言語の一回性が問題になる。朗読の後で聞き直したり、複数の朗読を聞き比べたりすることが難しいからである。

そこで、ビデオを活用し、生徒が自分の朗読の様子を視聴したり、聞き手が再度視聴したりできるようにする。生徒にとって、自分の朗読を客観的に見ることで、自分の朗読のよい点、改良すべき点が把握できる。また、繰り返し視聴することで、聞き手の評価もより充実させることができる。



板書例

野原はうたう
朗読発表会に向けて
ノートで確認
個人練習
聞き合い
交流

相互評価表には

- ・どのような工夫をしながら朗読していたか。
- ・どのような思いが伝わってきたか。
- ・「作者」の人物像や思いがよく伝わってきたか。

などを書くこと。

[単元の流れへ](#)

[HOME](#)

[本時の流れへ](#)

[評価問題](#)